

■ 目次	第19回研究発表会開催 / 友の会伝言板	1
	会員の研究ノート	2
	編集後記	6

発行：吉田東伍記念博物館友の会 〒959-2221 阿賀野市保田1725-1 (阿賀野市立吉田東伍記念博物館内)
TEL 0250-68-1200 FAX 0250-68-5016 web版友の会通信 <http://wind.ap.teacup.com/togo/>

E-mail y.togo@oregano.ocn.ne.jp

Twitter @y_togo

謎解き！『大日本地名辞書』表紙の「七つ星」

第19回研究発表会を開催しました

令和2年10月11日(日)、友の会会員による研究発表会「星のかずかず語りつけぬ 星空への招待特別編」を開催しました。会場は、安田交流センター・風とびあ1F多目的ホールです。本来、昨年3月に開催予定でしたが、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため延期になっていたものです。当日は、ソーシャルディスタンスを保つため、同内容で3回に分けて実施しました。詳細は、次頁以降に掲載した発表者・廣田正博さん(サークル「友の会天文部」責任者)による「会員の研究ノート」をご覧ください。

友の会伝言板

事務局より

- ①『吉田東伍記念博物館友の会設立20周年「吉田東伍生誕之地碑」建立記念誌—郷土の未来へ向けて—』(B5判・100頁、2019年発行)は引き続き絶賛発売中です(頒布価格 500円)。新規入会者には1部贈呈します。
- ②谷川健一氏の著作集『谷川健一コレクション5 地名の世界』(富山房インターナショナル、2020年8月発行)に「意義深い吉田東伍記念博物館の開館」が収録されました。
- ③新規会員を募集しています! ご近所、ご家族、ご友人に入会のお声がけをお願いします。
- ④原稿を募集しています! 『友の会通信』の「会員の研究ノート」「会員随想」「友の会伝言板」のコーナーへの投稿をお待ちしています。詳しくは友の会事務局までお問い合わせください。



▲「生誕之地碑」近影
(令和3年1月17日撮影)

『大日本地名辞書・七つ星の謎』

吉田東伍記念博物館友の会会員 廣田正博

★はじめに

これは友の会・第19回研究発表会で発表された3つのテーマのうち、七つ星の謎を探った部分だけをまとめたものである。

発表会では視覚的に分かりやすいよう大型スクリーンを使い、説明文投影の他、写真や図表のアニメーション化なども多用したが、その内容をそのまま文字化するのは困難であった。通信に掲載するにはスペースの問題もある。

そのため本稿では、図表や写真については最小限の数に絞って再作成したほか、内容構成の見直しも大幅に行っている。どうかその点をご理解いただきたい。

★『大日本地名辞書・七つ星の謎』

大日本地名辞書の背表紙を飾る、七つ星。

吉田東伍本人のデザインとされ、吉田東伍記念博物館のシンボルマークにも採用されている。博物館の開館以来、来館者から「星はどういう意味ですか？」という質問が寄せられてきたそう。

しかし、この七つ星については、解説された資料や伝承もなく、長い間その意味は不明であった。七つ星に該当する星座が特定できないことから、手がかりがつかめなかったのだ。



この七つ星は、大日本地名辞書が初版の分冊から合冊本となった第2版（明治40年）から、背表紙の上部を飾っている。

背表紙の下側には波模様、また初期の頃には中心に日本列島が描かれている。デザイン的には天と地でまとまっている感はあるものの、私見では天をイメージするなら太陽のほうがしっくりくるような気がする。あえて星をもってくるあたり、単に天地のイメージだけではないような印象を持った。

日本列島のデザインがその後、東国・北国、坂東、といった文字による見出しに変わっているところを見ると、日本列島の絵にはあまりこだわりがないようだ。

もしかすると、先に七つ星が完成していたが、それだけでは唐突感否めないの、全体の統一感を出すために当初は日本列島と波を加えたのかもしれない。



▲第19回研究発表会のポスター

ポスターに採用した星の図柄は、手稿本『星のかずかずかきつけぬ』中の、明治20年（1887）の日食観測図（博物館にて該当ページを展示中）。

いずれにせよ、東伍が意味のないことをするはずはない。ましてや大日本地名辞書を飾るシンボルマークだ。どういう意味を込めたのか、なぜそれを公表しなかったのか。

これからその謎を解いていこう。

デザインでまず目を引くのが、七つ星と背景の波模様である。波模様はおそらく天の川であろうことは容易に想像できる。星の数、星の配置、波模様の書き方、全てに意味があるのだろう。

星座や星団で「七」と言えば、誰でも真っ先に思いつくのは北斗七星であろう。しかし、地名辞書に繋がるような故事や語源等は見当たらなかった。位置的にも天の川とは離れているので、早々に候補からは外れた。

次に七つ星で連想されるのが昴(すばる)である。

もっとも、昴は和名で六連星(むつらぼし)という。私もその言葉は耳にしていたはずだが、すっかり忘却していた。もし覚えていたなら、昴を有力候補として思いつくには少々回り道をしていたかもしれない。

実は、「7」からすぐに昴を思いついたのは、私が天文少年だったからだ。中学生の頃に愛読した『天文ガイド』(誠文堂新光社)の記事に、「視力の良い人なら、昴は6〜7個の星を確認することができる」とあった。

しかし誰でも実際に昴を観察してみれば分かると思うが、昴を7個も勘定するのは非常に困難なことである。それは、現在より夜空に人工光の影響が少なく、視力も良かった私の少年時代でも同様であった。6個まではなんとかたどり着けるが、7個目は本当に調子のいいとき(体調、夜空の条件)でなければ見つけることは出来なかった。(もしかしたら見えていた気になっていただけかもしれない)

そんな体験があったため、私の中では『昴は七つ』という認識が出来上がっていたのだ。

ネットで調べていくと、和名は六連星でも、ギリシア神話では7人姉妹とされ、中国の二十八宿では、昴は7個で構成されていることが分かった。古い時代になるほど、昴の数が7個になるのは、現代とは個々の星の明るさが変化しているからである。古代ははっきりと7個の星が確認できたのだろう。

さて、「昴」の語源は、集まって一つになる、統一される。統べる、すまる、である(出典・デジタル大辞泉ほか)。日本初の全国的地誌として地名を統一・集約した「大日本地名辞書」に通じる。

その昴、天の川の中には位置していないが、それに一部かかる牡牛座に属している。ただし、牡牛座は西洋神話の星座であり、明治という時代を考えるとそぐわない感じもする。

また、江戸時代から明治にかけて天文学などに使用された中国由来の『二十八宿』では、昴は単独の星座である。しかも昴だけでは天の川に関係しない。

なお、二十八宿とは天球を28のエリア(星宿)に不均等分割したもので、天文学・占星術で用いられた。(出典:ウィキペディア)

ただ、東伍の手稿本『星のかずかずかきつけぬ』の中で、「漢土(注:中国)の人二十八宿を以て野を分かち 泰西(注:欧州)の人は八十宿を以て(以下、省略)」との記述があるので、当然ながら西洋の星座についても知識はあったはずである。

西洋の星座という理由で思考から外すことはないだろう。

「昴」にはもう一つ、興味深いことがある。

東伍の生年月日は、元治元年(1864)4月14日だが、これは旧暦のもの。東伍が9歳のとき(1873年)、明治政府は正式に太陽暦を採用している。

太陽暦では、東伍の生年月日は元治元年5月19日になり、これは西洋占星術では「牡牛座」になる。昴の属する星座だ。

しかし、西洋の星座名はともかく、西洋占星術まで東伍が知っていたのだろうか。

その西洋占星術、平安時代に日本に伝わったものの、次第に廃れていく。

日本に再び西洋占星術が蘇ったのは、大正3年(1914)に隈本有尚(くまもとありたか)が著した『天文ニ依ル運勢予想術』というから、地名辞書に星が採用されたときよりもずっと後のことである。

地名辞書第2版発刊当時は、西洋占星術に関する日本語の書物も占い師も皆無のはずで、そこから東伍が生まれ星座を知る由はない。

昴の属する牡牛座が生まれ星座というのは、さ

すがに偶然かと思ってた。

このことを博物館の渡辺文男さんに話すと、「東伍は12歳のときに新潟英語学校に通っていたし、先生は英国の女教師だったから、先生から聞いていた可能性はある」とアドバイスをいただいた。

しかも英国は17世紀から続く西洋占星術の中心地である。現在でも専門学校があり、多くの老若男女が占星術師を目指して勉強している。東伍が9歳のときに明治政府は太陽暦にしているので、12歳のときに学校でそんな話題になっても不思議ではない。

「私が生まれた英国では、東伍、あなたの星座は牡牛座よ」

そんな会話がなされたのであろうか。

そのことを覚えていた東伍が、自分の生まれ星座に属する昴の語源が地名辞書にぴったりだと気に入り、そこから発想を膨らませていった、という可能性は十分考えられる。

しかし、昴の配列と七つ星の配列は、お世辞にも似ているとは言い難い。

車メーカー・スバル社のエンブレムは大きな星1個（おそらく富士重工業）と、小さな星5個（合併した飛行機系5社）の計6個でデザインされているが、これも配列は本来の星団の並びとは全く違うものになっている。

配列はデザインの自由度の範囲内と割り切れれば、地名辞書の七つ星は「昴」ということで結論づけても良さそうではある。

それでも、もしかしたら角度を変えてみたらピッタリくるかもしれないと、私はパソコン上で昴と七つ星の写真を回転させながら比較していた。

最終的に七つ星の天地が逆さまになったとき、突然、私の目に非常に見慣れた配列が飛び込んできた。

（これって、射手座ではないのか？）

射手座は天の川銀河の中心方向に位置し、最も濃く天の川が観察できるため、写真でもよく目にする人気の高い星座である。牡牛座と同様、射手座は西洋の星座名である。二十八宿では射手座は斗宿（としゅく）というグループの中の斗、箕宿（きしゅく）というグループの中の箕という別の星官

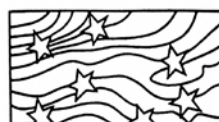


（星座）に分かれる。（ちなみに斗宿には10の星官がある）

斗を構成する星は6個、箕は4個であるが、地名辞書の七つ星はこの2つの星官にまたがった7個の配列に酷似している。

当時の日本天文学で標準であった二十八宿の形を崩してよいかという疑問もあったが、東伍が西洋、東洋といった狭い範囲に拘ることのほうが考えにくい。

パソコン操作上での偶然の産物ではあったが、天地を逆にした七つ星と射手座の配列を比べてみよう。



(正)



(逆)

密度

どうだろう、かなり似ているのではないだろうか。特に左上の台形をした4個はよく似ている。右側の3個の星は少しコンパクトにして4個の星側に寄せないと枠に収まらないのはデザイン上の許容範囲か。

これだけなら偶然の一致といえなくもないが、銀河と波模様の密度に注目すると、共に右端の星付近が濃くなっている。東伍は線を密に描くことで天の川の中心部分を表現したのではないか。この配列と密度の特徴は射手座とみて間違いはない。

さて、地名辞書の七つ星のデザインが射手座と酷似していると分かった時点で、新たな迷いが生じた。果たして、牡牛座の昴なのか、射手座なのか。意味的には昴を推したいが、配列の特徴は射手座である。射手座は銀河の中心方向にあるので、地名辞書の日本における中心的存在を意味するのか？ やや弱い理由だ。しかも、なぜか天地が逆さまである。

このことについて博物館の渡辺さんに話をしてみた。

「七つ星をひっくり返すと射手座に似てますよ」すると間髪入れず、次のようなエピソードを話してくれた。

「東伍は自分の名前の一部である東を日と木に分解して、日本生（にちもくせい）と名乗るなど、いろいろ仕掛けをする人だから、絵柄をひっくり返すことも十分考えられる」

吉田東とか落後生、蟻斧生というペンネームはたびたび耳にしていたが、日本生とは初めて聞いた。20歳前後の頃から使用していたのだそうだ。

その後、ネット上から入手した様々な資料を眺めているうち、ふとある事に気がついた。これは昴か射手座か、という「どちらか」ではなく、「どちらも」ではないのか。ある意図をもってこの二つを組み合わせたのではないだろうか。

ここまでのことを整理しよう。

- ① 7個の星で連想される昴は、集まって一つになる、統一される「統ばる、すまる」が語源。日本初の全国的な地誌として地名を統一・集約した「大日本地名辞書」に通じる。（属する牡牛座は東伍の生まれ星座）
- ② 全体のデザインは「斗」に非常に意味があるが、数を7個にしないと「昴」に関連付けられないため、あえて斗の大部分を含む射手座から選り出した。
- ③ この「斗」と「昴」を組み合わせ、ある意味を持たせた。

- ④ 射手座と気づかれないよう、逆さまに配置した。（自分だけの秘密として）

昴と射手座（斗）の組み合わせ、そこには、暗号ともいえる秘密が隠されていた。

これを解くため、再び二十八宿に目を向けてみよう。二十八宿は、古くから天文、^{れきちゅう}暦注などに使われてきた。暦注とは、暦に記載される日時・方位などの吉凶、その日の運勢などの事項のことである。

渋川春海による貞享2年（1685）の改暦で、それまでの二十七宿から中国流の二十八宿に変更された。貞享2年正月朔日を星宿とし、この表のサイクルが永遠に繰り返される。和暦自体は、その後何度も改暦されていくが、暦注の表だけは継続して使用されていた。

ここで前述した東伍の20歳の頃のペンネーム「日本生」を念頭に置いて暦注を見てみると、「斗」と「昴」の場所が「木」と「日」に位置しているのに気がつく。

つまり日本生。

（暦注）

	月	火	水	木	金	土	日
甲子辰	畢	翼	箕	奎	鬼	氏	虚
巳酉丑	危	觜	軫	斗	婁	柳	房
寅午戌	心	室	参	角	牛	胃	星
亥卯未	張	尾	壁	井	亢	女	昴

七つ星に含まれる様々な要素から、東伍自身の名が浮かび上がってきた。

これはある意味、地名辞書に押された落款のようなもの、と言えないだろうか。東伍があえてその意味を公表しなかったのも頷ける。通常、シンボルマークには例外なく会社や組織の理念や理想などが込められており、その意味を公表することで、多くの人に理解を深めてもらうことができるものだ。

しかし、地名辞書の七つ星は、辞書の理念を込めたものでもPR目的でもなく、東伍自身であった。

東伍が自らを示す七つ星を背表紙に刻んだ理由

について、さらに想像を巡らせてみよう。彼にとって、大日本地名辞書はどのような存在であったのか。

序文に記された「悪戦僅に生還するの想いあり」の言葉どおり、足かけ13年間にも及ぶ壮絶な執筆活動の末、ようやく完成した前人未到の超大作。まさしく命を削りながら完成させた大日本地名辞書は、彼の多くの著作物の中でも、特に思い入れの強い存在だったに違いない。

分身とも言える辞書に、人知れず自分の名を潜ませることで、それに命を吹き込んだのではないかと、とは考えすぎであろうか。それとも、少年が大切な宝物に名前を書くような、辞書に対する愛おしい気持ちがそうさせたのであろうか。

無論、真実は東伍自身しか知りえない。

大正7年（1918）1月、53歳でその生涯を閉じるまで、東伍はどのような眼差しで大日本地名辞書を見つめていたのだろうか。

（追記）

10月11日の発表会終了後、数日経って、毎週録画しているBS・NHKの番組「コズミックフロントNEXT」の10月8日放送分を観た。研究発表会の資料作りに追われ、直前に放送された回を見逃していたのだ。

この番組は発表会の資料作りに大きく貢献している。『英国がヨーロッパにおける西洋占星術の中心地で、現在でも専門学校に通う人が多い』、という情報もこの番組からだ。

10月8日の回は渋川春海について、一部を再放送していた。一部というのは、1年前の放送では1人だけ特集されていたのだが、そのときの放送分から一部を抜粋して徳川吉宗、伊能忠敬とともに「天と地の革新～江戸天文学、三人の俊才～」として再編集されていたのだ。

さて、この放送を観てみると、非常に興味深いことがあった。1年前の放送では気がついていなかった。

渋川は研究発表会の中でも取り上げたように、日本で823年間も使用された中国産の宣明暦から独自の貞享暦に改暦した人物である。（このときに、暦注も二十七宿から二十八宿に変更されている）。

放送によれば、渋川は宣明暦では日食・月食の予報が外れることが多いことから改暦を試みたのだが、もう一つ理由があった。それは暦の統一。

当時、日本には宣明暦の他、地方によって独自の暦が使用されていた。このため、旅に出ると出発地の日付より、到着地の日付の方が古かったりする事例があった。

そこで渋川は日本初の、全国を統一した暦を作ることと決意する。中国式の授時暦に独自の天文観測等から暦の補正に成功し、足かけ13年をかけ日本初の国産暦を完成させる。

その後（貞享2年）、幕府はこれを貞享暦として正式に採用する。

（ちなみに貞享2年は、安田の字が火を連想するため、保田に変更された年でもある。東伍は地名辞書の中で『拘忌の陋習笑ふべし』と皮肉っている）

さて、渋川春海は東伍に少なからず影響を与えていないだろうか。

地名辞書編纂より200年以上前のこととはいえ、現代でもTV番組で取り上げられるほどの偉人のエピソードなら、東伍も知っていたであろう。

明治政府が断念した大事業に立志する際、「渋川先生が暦の統一をしたのならば、私は地誌を統一しよう」という思いが、一瞬でもよぎったのではないかと想像してみることも面白い。費やした年月が13年間、という数字の因縁も妙だ。

この度の研究では、様々なエピソードや出来事など、それら個々に繋がった糸が互いに引き寄せられ、一つにまとまっていくような感覚を覚えた。

出会っていない糸はまだ、あるのだろうか。

編集後記／今号は、昨年10月に開催された研究発表会を中心に構成しました。発表者の廣田正博さんの語り口により紙上からも謎解きの楽しみが伝わってきます。コロナ禍に大雪と試練が続きますが、前向きであることを忘れずに、友の会の「未来」を考える日々が続いています。（事務局T）

